



フクイチ過酷事故から 12 年 ～汚染のいまと「原発回帰」にどう対処するか～

齋藤 安史・原発と自然エネルギー研究会

I 少し長い「はじめに」

1 原発部会とのかかわりあい

2023. 3. 12(日) 「第 12 回力あわせる 200 万群馬さよなら原発アクション」には原発部会は「原発文庫」を出店しました。400 余名が参加。

(詳細は、右の QR コードからフォーラム HP 別館「原発と自然エネルギー研究会の部屋」を参照ください)



数年前のこの集会で、「原発をなくす前橋連絡会」の店の隣に原発部会も出店し、原発関連資料・出版物を展示されており、そこで部会と僕とのつながりが始まりました。3. 11 フクイチ過酷事故の記録や核兵器・核力発電—原子間の化学反応エネルギーの数万倍の核反応の熱エネルギー(の大部分を捨てながら)によって発生させた水蒸気で発電機のタービンを廻すのですから、核力発電の方がより適切だと思うのですが、あまりポピュラーでなく、原子力発電が用いられています—関係の出版物を持参し、押しかけ的に部会に参加してきましたが、昨年の総会で「共同研究者」として正式に認定されました。

前橋連絡会の前橋駅前金曜日行動(略称「マエキン」)への行動の参加者などに配布している「核兵器・核力発電」を部会のみなさんに送ったり(ここでも「押しかけ資料送付」)、時には「生命の歴史」の講義をさせられるなど交歓を深めています。

2 若干の<自己紹介>

1939 年生まれ ⇒傘寿三老 サンジュサブロウ
1959 年 大阪大学理学部・高分子固体構造を X 線回折などで研究
1966 年～2004 年 群馬大学工学部
群馬大学教職員組合 中執/書記長/委員長など
1970 年「大学紛争」当時から、古い木造の教育会館で、県教組・高教組と協力したり、論争したり、

「群馬県高校教育研究所」の催しにもたまに参加。日本科学者会議群馬支部で、安中鉦害回復・(尾瀬の)自然保護運動など、「群馬評論」編集委員—世紀の変わり目あたりから、研究対象をく科学・技術政策>にシフト—

1998 年～2007 年 全国大学高専教職員組合中央執行委員(教文部長、副委員長)・高等教育研究会、教員任期制・国立大学法人化反対 など

2006 年～ 日本科学者会議(全国)科学・技術政策委員会、大学問題委員会

2012 年～ 原発をなくす前橋連絡会・事務局員

3 コロナ禍のもとで<前橋引きこもり>

<乱読・積読・斜読…>読み始めると作者(映画監督も)

の全体を読みたくなる 下線は原爆・原発関係
松本 清張; 西郷札—延命の負債—神と野獣の日—
昭和史発掘—草の径—神々の乱心
井上ひさし; ひよっこりひょうたん島—吉里吉里人—
父と暮らせば—四千万歩の男
篠田 節子; 絹の変容—聖域—ブラックボックス—
介護のうしろから「がん」が来た
カレルチャペック; ロボット—白い病—山椒魚戦争—
童話の作り方—創造者アダム
五味川純平; 人間の条件—自由との契約—孤独の賭け—
戦争と人間
日本原子力学会; 原子力がひらく世紀, 福島第一原子力発電所事故—
その全貌と明日に向けた提言—学会事故調最終報告書—,
原子力のいまと明日

<映画観賞> DVD を一人で—開始・中断・再生自由
黒澤 明; 七人の侍—生きものの記録—悪い奴ほどよく眠る—
夢—八月の狂詩曲
岡本喜八; 独立愚連隊—日本のいちばん長い日—
肉弾—激動の昭和史・沖繩決戦
山田洋次; 故郷—男はつらいよ—東京家族—母べえ—
母と暮らせば—家族はつらいよ

II まず状況把握のためのデータを知ることから

3.11 原発過酷事故を終わったものにする策動を進める一方、〈現〉原発を使い尽くし、〈次世代〉炉建設への妄進を進める現政権の動きの認識を共有することから始めよう!

1 フクイチの現状；

施設および周辺の汚染の現状の一部だけ。詳細と人的被害については〈原発文庫〉—フォーラム HP 別館「原発と自然エネルギー研究部会の部屋」に目録あり—などの成書を参照。

【核燃料デブリ】 フクイチで、熔け落ちた「核燃料デブリ」の総量は、1号機から3号機あわせて880トンにもものぼると推定されている。試験的なものと位置づけられロボットアームを使っての取り出しは、数グラム程度を取り出す計画に過ぎず、全体をどのように取り出すかの具体的な道筋はいまだに見通せていない。事故直後から建屋の地下に放置されたままになっている（汚染水の放射性物質濃度を下げするために使われた）高線量廃棄物ゼオライト土嚢は、約1300袋に上り、炉の廃棄作業の障害となっている。

【汚染水】 デブリの冷却に使う水や地下水などが汚染水となり、いまも1日100トンのペースで増え続け、汚染水を処理したあとに残るトリチウムだけでなく（ALPSで取りきれなかった）ストロンチウム Sr、コバルト Co などの放射性物質を含む「処理水」は、3月はじめでおおよそ133万トンに上り、1000基余りのタンクが満杯になる見通しで、〈基準〉の40分の1まで薄めた上でことし春から夏ごろにかけて海への放出に使う海底トンネルの工事は6月には完了する見通しで、周辺漁民などの反対を押し切って放出を強行しようとしている。

【汚染土】 事故で原発から放出した放射性物質は、福島県内など広い地域の土地や建物を汚染した。各自治体では除染が進み、その際出た土など廃棄物汚染土はフレコンバッグ（土嚢袋、1袋で1m³）に入れて集約され、福島第一周辺に造られた（最終処分のための「一時的」なものとされている）中間貯蔵施設へ搬入の総量は2022年11月末時点で、福島全

59市町村のうち52市町村から約1336万m³。

保管を始めた2015年から30年後の2045年には汚染土を福島県外の最終処分場に搬出することを約束しているが原発事故で汚染されたごみを受け入れる自治体があるのかは分からず、候補地は未定。

【出口なき “核のごみ”】 通常に稼働している原子力発電所でも運転に伴い使用済み核燃料が発生し、日本ではこれらを化学処理してプルトニウム Pu とウラン U を取り出し再び燃料として利用する「核燃料サイクル」を原子力政策の柱としているが、再処理の過程で再利用できない（放射性物質を含む）廃液を化学的に安定化するため、ガラスと混ぜて固めた高レベル放射性廃棄物（いわゆる「核のごみ」）は、極めて強い放射線を長期間出し続け、人の生活環境から数万年にわたり隔離する必要があるが、それを地下深く埋める場所も決まっていない。

2 原発の「最大限活用」・「次世代炉」の推進

政府は世界的な脱炭素に向けた動きや、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻でエネルギー危機深刻化のなかで、3.11後、「想定していない」としてきた原発の新設や増設、建て替えを認める見解を本年2月「脱炭素社会の実現に向けた電気供給体制の確立を図るための電気事業法等の一部を改正する法律案」として閣議決定し、国会へ提出、審議中である。

【運転延長】 2月に新たに示された「原発を最大限活用する」ための政策では、原発事故以降、最長60年と定められた原発の運転期間について、審査などで停止した期間を除くことで、実質的に上限を超えて運転できるように変更する。

【次世代炉と再稼働】 具体的には廃炉となった原発の敷地内での建て替えを対象に次世代型の原子炉の開発や建設を進める。次世代炉として想定されているのは、▼「革新軽水炉」▼「小型軽水炉」▼「高速炉」▼「高温ガス炉」▼「核融合炉」の5種類が挙げられているが、前途は不明という評価もある。

原発の再稼働を加速するため、国が前面に立つ方針も打ち出し、すでに審査が終了し再稼働していない7基について、2023年の夏以降の再稼働を目指すとしている。